판소리 傳承의 地域的 基盤과 意味

パンソリ伝承の地域的基盤と意味

金 惠貞 김혜정 / Kim Hey-Jung
［李 德雨 訳］

I. 序論

パンソリは、一人が鼓手の太鼓の伴奏に合わせて叙事的な話を語る音楽であり、伝統音楽の中では、歌って伝達する叙事音楽劇としてよく知られる非常に重要なジャンルのものである。パンソリは音楽を手段として用いながら劇を展開していくため、音楽的な技巧と伝達能力が何よりも重要な要素となる。したがって、パンソリは伝統的に徒弟制の中で口伝心授の形を取りながら伝承されてきた。

芸術音楽（Art Music）の一つであるパンソリは聴衆の嗜好を反映しながら、公演空間の変化や観客層の拡大、各時代の要求の変化に機敏に反応してきた。それがパンソリがもつジャンルとしての特性であり、それをパンソリの生命力ということもできる。20世紀初頭にパンソリ伝承が弱体化した際には、このような生命力を失って行くこともあったが、今再びそのような伝承の原理を生かしてその力を取り戻そうとする動きがあるのも事実である。

韓国・全羅南道

本文では、このような歴史的な流れの中で、パンソリを支えてきた地域の基盤と伝承の原理を整理し、現在の湖南地域を中心に行われているパンソリの教育、地域を基盤とするパンソリ伝承の実態、時代の変化に合わせて適応しようとするパン

ソリの変化と創造的継承など、パンソリの今日と関連したいくつかの側面について検討してみたいと思う。これにより、パンソリの地域的な基盤が持つ意味を整理することを、本文の目的とする。

II. パンソリの地域的基盤と伝承原理

パンソリの形成は、17期末から18世紀初頭にかけてなされたものと推測される。パンソリの起源については諸説あるが、音楽学では、初期には湖南の巫楽と音楽的な内容が類似しているという理由を挙げて巫楽起源説が主張され、近年では唱優集団の広大（ガンデ）〔人形劇・仮面劇などの演劇や綱渡り・軽業・パンソリなどの芸人を指す〕ソリに起源を持つものと修正されている。柳振漢の晩華集に描かれた記録を土台からは、初期のパンソリが湖南を背景として、この地域の人々に享有されていたものと推測することができる（図1）。

筆者は、パンソリの音楽的な土台は湖南の民謡と巫楽にあると考える。湖南の音楽は、ユクザベギ〔韓国の南部地方で歌われる民謡の一つ〕調の音階を使用し、3小拍4拍の構造や6拍構造を持つものが多く、これがそのままパンソリに反映されたものと思われる。実際にユクザベギ調の民謡は様々なジャンルを作り出しており、湖南地域の人々の創意性は大きな役割を果たしてきた（図2）。

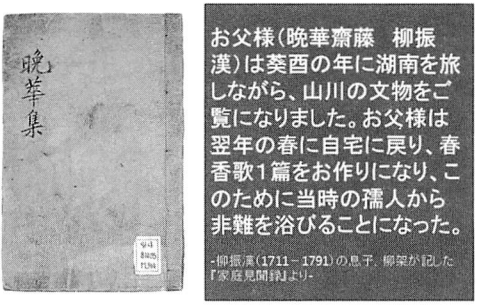


図1　柳振漢の晩華集

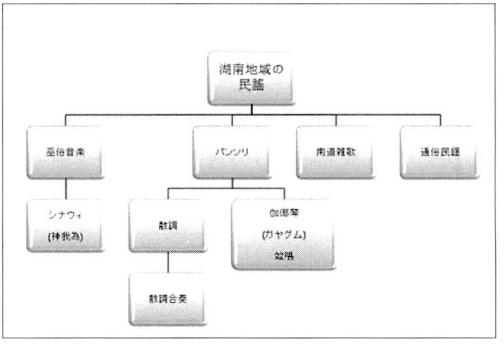


図2　ユクザベギトリのジャンルを作成

初期において、湖南地域の平民たちの嗜好に合わせて作られたパンソリは、19世紀から20世紀にかけて、様々な時代的な変化を経験してきた。この変化は、大きく三つに分けて整理することができる。まず、パンソリの演じられる場所が湖南以外の地域まで拡大したことにあ

享有層	平民	平民、中人、両班
享有地域	湖南、忠清	湖南、忠清、京畿、慶尚

享有層と享有地域の広大による変化		
演行空間	パン	パン、室内
辞説	12パタン	6パタン、辞説整理、漢文句、辞説添削
音楽語法	湖南音楽	両班音楽語法受用 他地域民謡旋法受用

表1　19世紀と20世紀のパンソリに現れた変化

る。二番目は、パンソリの聴衆が平民のみから両班と中人を含む全階層へと拡大したことである。さらに、20世紀に入ると、そこには大衆という新たな聴衆までが登場している。三番目は、パンソリの行われる空間が、「パン」から「室内」拡大し、20世紀には西洋式の舞台へと変化したことである（**表1**）。

パンソリは、このような時代の変化に適応する中で、辞説と音楽を変化させ、形式を変化させてきた。辞説は室内で聞いても趣を感じられるほど精巧に整えられ、両班層に向けて漢文句の難解な表現を取り入れてもきた。さらに、他地域の民謡の旋律もパンソリの中に取り入れられ、両班たちの趣向に合うような歌曲を真似て歌われるようになった。

20世紀に入ると、西洋式の舞台の登場に合わせ、そもそもは独唱の形式をとっていたパンソリを、多数の唱者が演劇的な行為をする「唱劇」へと変化した。また、20世紀初頭の歴史的な状況を反映した「烈士歌」のような新しい内容のパンソリが作られ、留声機音盤で多くのパンソリを録音して発売することで、大衆の間に流通するようになった。音楽の面では、時代の不運を込めて、悲しさを表現する界面調〔韓国固有の俗楽音階の一つ〕がみられる場合も多かった。さらに、パンソリがソウルに進出したことにより、ソウルと京畿地域の語法を用いたパンソリも盛んに行われるようになった。

しかし、パンソリの演じられる地域の変化は、パンソリ自体がもつアイデンティティを変えることにはならなかった。パンソリの歌い手たち（ソリクン）が、他地域の音楽文化をパンソリ化して自主的に受用したためである。パンソリに溶け込んだ京畿道のソリと慶尚道のソリは、もはや京畿道と慶尚道のものではなく、すでにパンソリへと変化させられている。これはつまり、パンソリが持つ創意的、自主的な受用態度によってできた結果である。

以上のようなパンソリの変化に関する簡潔な整理からは、パンソリが時代の流れにきわめて積極的に適応してきたことがわかる。パンソリは芸術音楽である。芸術音楽とは、音楽を職業とする人々が公演を通じて生計を維持する性質を持つ。したがっ

て、それが芸術的に洗練され、高い完成度を持つことは当然であり、そこに大衆の趣向を直接的に反映することが芸術音楽が生き残りに成功する原理である。つまり、パンソリが聴衆と地域の変化に適応して積極的な変化を続けてきたことは、このようなジャンル的な特性があったためであるといえる。演じられる地域の変化により、様々な地域音楽がパンソリに入るようになったが、その本質と重心は依然として湖南に置かれていることがわかる。

III. 湖南地域におけるパンソリの伝承

本章では、現在のパンソリが誰によって歌われ、誰によって享受されているのか、その教育を受けるのは誰なのか、パンソリの音楽や辞説はどのように変化していのるかといった点について、いくつかの側面から検討を試みる。その具体的な事例として、パンソリが現在基盤としている湖南地域の例を挙げる。

1. パンソリの演者と聴衆の地域的な基盤

パンソリは現在どのような姿を持っているだろうか。パンソリが基盤とする地域は、依然として湖南である。最も有名なパンソリ専門家の多くが、湖南の出身者である。他地域の出身者の歌い手もみられるが、彼らには超えられない限界が確かに存在しているのも事実である。多くの歌い手はソウルを中心に活動しているが、パンソリの聴衆ははその大多数が湖南地域の出身者である。それは、他地域出身者にはパンソリを深く理解することや、共感することが難しいためである。

現在、重要無形文化財の伝承者として認定されている人に、成又香、成昌順、宋順燮、朴松熙、鄭哲鎬の五人がいる。成又香は全南の和順、成昌順は光州広域市、宋順燮は全南の高興、朴松熙は全南の和順、鄭哲鎬は全南の海南出身である。この五人の保有者はすべて全羅南道の出身であり、朴松熙以外の四人は全羅南道のパンソリの教師からパンソリを学んだ。成又香と成昌順はいずれも全羅南道の宝城に行き、鄭應珉という教師からソリを学んだ。さらに、宋順燮は順天で朴奉術に私事し、鄭哲鎬は光州の林芳蔚にソリを習った（表2）。

興味深いのは、彼らの地位が上がるにつれ、主な活動拠点としていたソウルから離れて故郷に戻ったり、ソウル以外に戻るための基盤を設けたりする場合が多くなっていることである。成昌順は自分がソリを学んだ宝城で伝授館を整備し、そこで後進たちにパンソリを教えることが多くなっており、宋順燮は完全に順天に戻り、順天を主な活動拠点として東便制パンソリ復興を起こしている。ほかにも、鄭哲鎬は長興郡で

保有者	保有種目	出身地域	先生	先生の居住地
成又香	春香歌	和順	鄭應珉	全南 宝城
成昌順	沈清歌	光州	鄭應珉	全南 宝城
宋順燮	赤壁歌	高興	朴奉術	全南 順天
朴松熙	フンボ歌	和順	朴錄珠	慶尚北道
鄭哲鎬	鼓法	海南	林芳蔚	光州廣域市

表2 重要無形文化財保有者の出身地域とその教師の地域的基盤

長興国楽大殿という競演大会を1999年から毎年開催している。

湖南は非常に長きにわたり、このようなパンソリの教育的な基盤となってきた。パンソリの演じられる地域が広がり、大衆性を確保するために多くの歌い手がソウルで活動する現在もなお、パンソリクン〔クンは一部の名詞に付いて、その事を専門的・習慣的に行う人々を表わす言葉〕を作り出す地域は湖南なのである。実際にパンソリを積極的に享受しようとする人々は湖南の人々である。これは、韓国では地域ごとに音階と長短が異なり、それぞれの地域の人々が好む音楽に違いがあるために現れた現象である。これは、京畿道と慶尚道の地域の人々がパンソリをあまり愛していないためであるともいえよう。したがって、パンソリの地域的な基盤は、今も昔も、湖南であることを伺うことができるだろう。

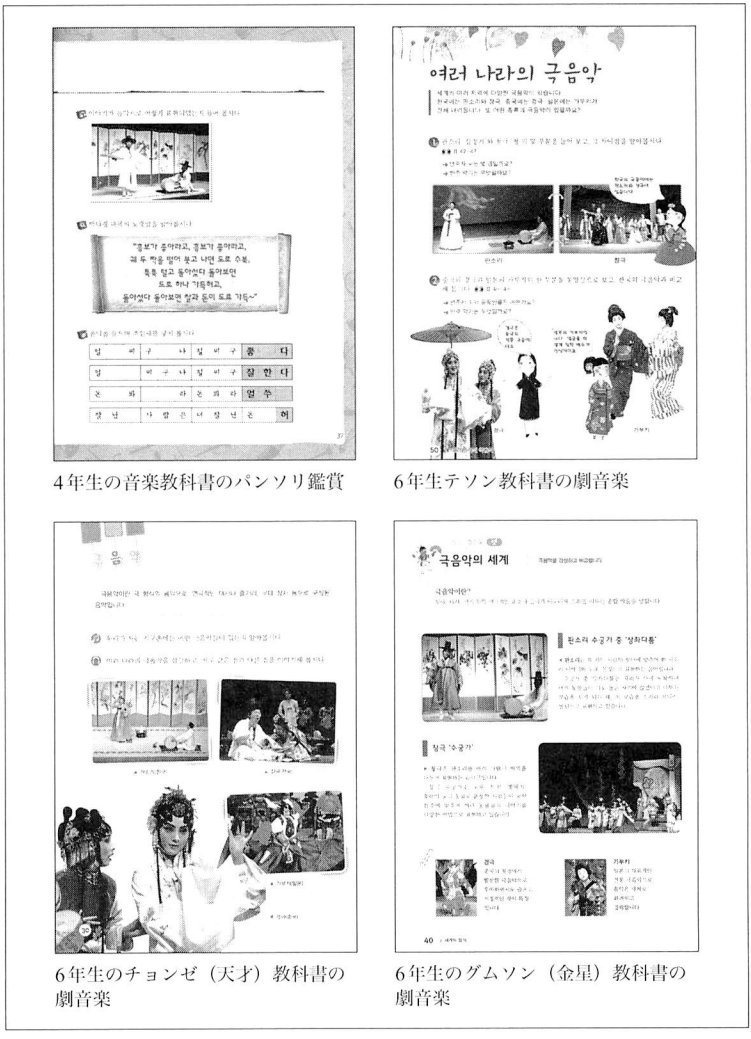
2. パンソリ教育と伝承の地域的基盤

現在、正式に行われているパンソリの教育とはどのようなものであろうか。パンソリは、伝統芸術の代表的なものである。さらに、ユネスコが指定した世界無形文化遺産にも登録されている。これらの背景をもとに現在、韓国人を対象とした教育の中では、パンソリの教育を義務として定めている。教育課程において、パンソリは音楽科目と国語（文学）科目の中で扱われる。国語科目の内容は、パンソリの辞説に集中する傾向があり、それだけではパンソリという総合芸術的なジャンルを伝達するには不十分である。一方、音楽科目の中では音楽に集中しながら、歌詞の内容も十分に説明されており、本質的なパンソリ教育により近い形式をとっているといえる。初等教育課程で用いられる音楽の教科書から伺えるパンソリ教育の状況は、次のとおりである。

現在、初等教育（小学校）課程では、4年生と6年生の教科書でパンソリが取り上げられている。4年生では、語りの音楽としてのパンソリを取り上げ、6年生では、世界の多くの劇音楽とパンソリを比較する形で扱っている。また、どちらでも音楽の

価値を広く認識させるために、パンソリを世界無形文化遺産に登録された文化の一つであることを紹介している（図3）。

子供たちには、このような授業を通じて一般的にパンソリを鑑賞する機会が与えられる。また、一部の学校では、サークル活動や裁量活動〔韓国では、1997年度から学校教育課程を教科活動、裁量活動、特別活動にわけられ、その中で裁量活動は学生の創意意識を涵養させ



4年生の音楽教科書のパンソリ鑑賞

6年生テソン教科書の劇音楽

6年生のチョンゼ（天才）教科書の劇音楽

6年生のグムソン（金星）教科書の劇音楽

図3　初等学校（小学校）教科書にみるパンソリ教育の内容

る活動である。、授業後の学習などを通じてパンソリをより専門的に教えている。文化観光体育部〔韓国の国家行政機関の一つ〕では、そのために講師をサポートするプログラムを全国で実施している。このように、全国の国民がパンソリを学べるようになっている。

しかし、パンソリの教育を受ける機会が全国の子供たちに与えられていても、結果的には地域ごとに差が発生している。湖南地域の子供は、パンソリを他の地域の子供たちよりはるかに簡単に学ぶことができる。一方、他地域の生徒たちはそうでもない、という傾向がみられる。結果的に、湖南地域の子供の中からパンソリの専門家が育つ可能性がきわめて高いのである。これは、パンソリの発声法が湖南の人々の方言を基盤としており、湖南の子供の発声と発音がパンソリを演じるのに適しているためである。

パンソリの教育は、中・高等学校にもなっても続けられる。現在、韓国には芸体能科目〔韓国では、音楽、美術、体育といった科目を合わせて、芸体能科目と総称する〕を専門的に教育する特殊教育機関が存在する。こうした芸術高等学校は全国的にあるが、パンソリ専攻を設けて教育するところはさほど多くみられない。それを示す資料が、**表3**である。

表3からわかるように、ウルや大田などの大都市にある3カ所の学校を除く5カ所の学校が湖南にある。大都市の場合には、すべての地域文化を受容することが目的とされる傾向にあるため、これを除くと、パンソリを専門的に教育して、専門家を養成する場所は、依然として湖南であるといえる。つまり、湖南地域で育てられた子供たちがパンソリを学び、成長してからソウルなどの大都市を含む全国各地で活動し、歳をとると再び故郷へ戻ってきて後進たちにパンソリを教えるという構図が、現在でも存在しているのである。

3. パンソリ演出機関の地域的基盤

それでは、パンソリの演出を主に担っている機関を支える地域的な基盤はどのようなものであろうか。現在、パンソリの演出において重要な役割を果たす機関としては国立国楽院、国立唱劇団、市・道自治体の国・公立機関が挙げられる。このうち、国立唱劇団はソウルにあるが、国立国楽院は地方に分院をもち、とりわけ湖南地域には多くの国公立機関が存在している。本章では、これらの機関の活動状況とパンソリ演出に関わる機関の地域的基盤との関連を考察する。

まず、国立国楽院はソウルに本院を置き、地方に分院を設置している。それは、早

学校名（位置）	設置年度	パンソリ専攻の学生		パンソリ講師数
		学年	学生数	
光州芸術高等学校（光州）	1982	1	8	5
		2	11	
		3	10	
国立国楽高等学校（ソウル）	1956	1	6	1
		2	5	
		3	5	
国立伝統芸術高等学校（ソウル）	1958	1	9	14
		2	12	
		3	17	
南原国楽芸術高等学校（全北・南原）	1997	1	9	4
		2	10	
		3	5	
大田芸術高等学校（大田）	1991	1	3	1
		2	1	
		3	0	
全南芸術高等学校（全南・木浦）	1991	1	3	3
		2	2	
		3	4	
全州芸術高等学校（全北・全州）	1994	1	13	12
		2	5	
		3	6	
韓国伝統文化高等学校（全北・全州）	2002	1	4	3
		2	2	
		3	3	

表3　パンソリ専門教育機関における中・高等学校課程設置の現況

いものから全北南原、全南珍島、釜山広域市の順に設置された。国立国楽院分院が最初に建てられた南原では、パンソリと唱劇を主なレパートリーの一つとしている。南原民俗国楽院の設立目的と趣旨が、当該地域の中心的な文化ともいえるパンソリの伝承に重点を置いて設定されていることがわかる。全南珍島に建てられた南道国楽院も、民俗音楽の演出を中心に据えている。ここでは南原との重複を避けるために、クッ音楽や民謡などに焦点を合わせているが、非常に多くの歌い手が団員として南道雑歌や民謡、パンソリなどの公演をしている。

国立国楽院の地方分院では、各地域の文化を特殊化させながら発展させることを希

望している。したがって、全南と全北に設置されている国立国楽院は、当該地域の文化である南道民謡やパンソリ、巫楽、散調、シナウィなどの様々なジャンルの音楽を中心に据えなければならない。そのため、そこに所属する団員も南道地域出身の南道音楽演奏人たちが多くなる。

全南はほかにも、全南道立国楽団と光州市立唱劇団、光州市立管弦楽団などの団体を運営しており、全北も全北道立国楽団が置かれている。また、全南道立国楽団、光州市立管弦楽団などの団体でもパンソリを中心的なレパートリーとして扱っている。これは全南と全北では、パンソリの公演が最も大きな人気を集めるためである。

以上で説明したように、パンソリを主なレパートリーとし、パンソリを機関の核心的な事業として考えているいくつかの団体は、湖南に集中的に設置されている。ほかにも、各種の私設団体と個人経営の団体や施設などパンソリのための機関や空間が、湖南に最も多く集中している。

4. 湖南地域を歌い上げるパンソリ

パンソリは湖南で作られたために、春香歌のような話の場合、物語で中心的な位置を占める地域は南原に設定されている。ほかにも、沈清歌の舞台は谷城であり、フンボ歌は雲峰を中心に描かれている。しかし、時代が変われば、物語の内容にも変化が生じるのは当然である。20世紀に入ってからは、新たな物語を歌うパンソリも作られている。その中には、湖南地域を歌い上げるパンソリも存在する。

伝統的な芸人の中には、自分が居住する地域を素材としてパンソリを作る者もいる。短歌「順天歌」がその代表例である。順天歌は、順天出身の作家、李榮珉が作った詩を短歌として作り変えて歌うものである。

また、1990年には「五月光州」という5.18光州事件を歌ったパンソリの作品も作られている。当時の民主化運動の熱気と相まって、五月光州は多くの人々の関心を引いた。しかし、政治色が濃厚な歌詞と叙事的な構造の不在のため、長くは愛されなかった。

湖南地域の出身者によって再び湖南が取り上げられ、歌われる現象が見られるのは当然なことである。彼らの愛郷心がこめられたソリを介して、パンソリの地域的基盤である湖南がより大きな意味を与えられているのも、また事実である。

IV. 結論：歌は地域を生かすことができるのか？

人々は、語るように歌うものである。この場合、言葉は意思伝達の手段であり、歌

は感情疏通の手段となる。このため、同じ方言を使う人々は、お互いの話だけでなく、その背景に隠された意味をも理解することができる。これこそが文化的な疏通と呼べるものであり、感情を疏通させることであるといえよう。さらに、人々は方言の音が持つ高さ、すなわち地域の音階で泣くものである。この泣きの意味は、同じ文化圏の人々の間で共有される。自分のソリを理解してくれる人々とは、その感情を共有することができ、それにより慰めを得ることもできる。

自分の方言とは別の方言の音に出会った時、人々はそれを耳慣れないものと感じる。時にそれは珍しく面白いものに聞こえることもあるが、その限界は明らかである。それは、胸の内で最も深い所を鳴らして悲しみを引き出したり、シンミョン（興湧）に振れることはできない。結局、人というのは自分の声に最も近い音に心を奪われ、興奮して絶叫するのである。これを体現するのが、まさに地域の伝統音楽であるといえよう。

地域の方言、なかでも地域の音楽的な方言によって作られたのが湖南地域の歌、パンソリである。その後パンソリは、普遍的な芸術性と洗練性を確保して、広く大衆化されていった。しかし、それに込められた深い意味を隅々まで理解して鑑賞することができる人は、まさに湖南の人々であった。さらに、それをきちんと表現することができる人も、やはり湖南地域の人々であった。なぜなら彼らは、生まれる前からすでに母の腹でそのような発声と音色、声を体得しているからである。これは、逆らうことのできない宿命なのである。

地域の歌は、地域を生かすことができるだろうか？それは、当然である。地域の歌は地域の言語である方言のアクセントや長さ、地域の発声法と人々の声が醸し出す音色がすべて消えてなくならない限り、有効である。そして、地域の歌が息づいているからこそ、人々は歌によって真の慰めを得ることができ、情緒的にも安定することができるのである。地域の歌は、地域のみならず、地域の人々をも生かす存在なのである。

パンソリを作り、歌い、享受する人々は、湖南地域を基盤としている。そのため、そこにはパンソリを湖南で伝承、教育、公演するという循環の構図が存在するはずである。そして、このような現実的な理由のもとで、実質的な附加価値が創出されることというのは、自然についてくる付随的な利益であるといえよう。しかし、我々が忘れてはならない地域民謡の最高の価値とは、経済的な価値ではなく、人々のための歌であるという情緒的な価値であるといえよう。